部活集団の連帯性を規定する要因

吉村 斉

(高知学園短期大学)

Key Words : 連帯性, 自己表現, リーダーシップ

Factors regulating solidarity of athletic clubs

Hitoshi YOSHIMURA

(Kochi Gakuen College)

Key Words: solidarity, self-assertion, leadership

目 的

吉村 (2010) によると, 運動部員の部活動に対する積極性や満足感は部員自身の自己表現のあり方や主将のリーダーシップとの関係に規定されることが示唆された。さらに, そのためには部の人間関係のまとまりが重要な要因になることが示唆された。それゆえ, 有意義な部活生活を送るためには, 部の人間関係をまとめる (以下, 連帯性) ための自己表現やリーダーシップのあり方が問われると推察される。そこで, 本研究では, 部活集団の連帯性を規定する要因として自己表現と主将のリーダーシップとの関係を検討することとする。

方 法

調査対象者 4つの中学運動部員2年生510名(男子309名, 女子201名)を対象とした。主将は含まれていない。

調査の内容 本研究では, 自己表現に関しては吉村(2010)の自己表現・主張, 利己的表現各尺度を, リーダーシップについては吉村(2009)の尺度から技術指導, 人間関係調整, 圧力に関する質問項目を用いた。さらに, 連帯性については吉村(2009)で作成された連帯性尺度10項目を用いた。

調査の実施 2008年6月, クラス担任の先生を通じて調査が実施された。回答はすべて6件法であった。

結 果

部員の類型化

1. 部員の自己表現の類型化 各対象者の自己表現・主張尺度得点(項目あたりの平均値, 以下の尺度も同じ)と利己的表現尺度得点について, 各尺度の全体の平均値(自己表現・主張: $M=3.71, SD=0.85$; 利己的表現: $M=2.94, SD=0.80$)を基準とした高低に応じて4種類に類型化した。

第1は, 自己表現・主張も利己的表現も平均値より高いことから, 「主導的表現群」と命名した。第2は, 自己表現・主張のみが高いことから, 「積極的表現群」と命名した。第3は, 利己的表現のみが高いことから, 「利己的表現群」と命名した。最後に第4は, 両尺度得点ともに平均値を下回っていることから, 「消極的表現群」と命名した。

2. 主将のリーダーシップの類型化 リーダーシップに関する3つの尺度得点を説明変数としてクラスター分析(k-means法)を行った。その結果, すべてが各尺度得点の平均値より高い「圧力H-積極的指導群」, 圧力のみが平均値より低い「圧力L-積極的指導群」, すべてが平均値より低い「圧力L-消極的指導群」, 圧力のみが平均値より高いことから, 「圧力H-消極的指導群」に分類された。なお, 圧力L-消極的指導群に分類された対象者は61名と少なかった。そのため, 本研究の分析に耐えられる人数ではないと判断された。先行研究からもこの類型については否定的な考察で共通していることから, 本研究では分析の対象から外すこととした。

部活集団の連帯性を規定する要因の検討

連帯性尺度得点を従属変数とした自己表現(3)×リーダーシップ(3)×性別(2)三要因分散分析を行った。分散分析の結果, 自己表現, リーダーシップ, 性別の各主効果(F

(3, 424) = 4.10, $p < .01$; F (2, 424) = 74.34, $p < .001$; F (1, 424) = 15.27, $p < .001$, $MSe = .53$)が認められた。多重比較の結果(有意水準を $\alpha = .05$ とした Tukey の HSD 法), 自己表現については積極的表現群および主導的表現群が利己的表現群より, また積極的表現群は消極的表現群よりも有意に高かった。次にリーダーシップについては, 圧力H-積極的指導群および圧力L-積極的指導群が圧力H-消極的指導群よりも有意に高かった。さらに, 性別については女子が男子よりも有意に高かった。

また, 自己表現とリーダーシップの交互作用(F (6, 424) = 2.30, $p < .05$)も有意であった。単純主効果の検定を行うと, 圧力L-積極的指導群において積極的表現群が利己的表現群よりも有意に高かった(F (3, 424) = 4.09)。

さらに, 3要因の交互作用(F (6, 424) = 2.32, $p < .05$, Figure 1)も認められた。単純主効果の検定を行うと, 男子において, 圧力L-積極的指導群では積極的表現群が消極的表現群や利己的表現群より高かった(F (3, 424) = 6.63)。

Figure 1 連帯性における各性の自己表現とリーダーシップの関係 (左: 男子, 右: 女子)

考 察

本研究で特筆すべき結果は, 男子の連帯性において, 圧力L-積極的指導群では積極的表現群が消極的表現群や利己的表現群より高いことである。他のリーダーシップ群や女子でこのような有意差は見られなかった。つまり, 男子で主将が厳格に注意する態度が弱い場合, 部がまとまるためには部員に「利己的表現を抑制して積極的に自己表現する」スキル, すなわち相互理解を目指す自己表現が求められることが示唆された。

引用文献

吉村 斉 (2009). 部活動への積極性・満足感を規定する連帯性と主将のリーダーシップの関係 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 45.

吉村 斉 (2010). 部活動への適応感と競技特性の関係: 運動部員の対人スキルと主将のリーダーシップに注目して 青年心理学研究, 22, 45-56.

※本研究の調査実施においては科学研究費補助金(若手研究(B), 19730397)の助成を受けて実施された。さらに, 科研費助成終了後の期間に研究をまとめ考察するにあたっては高知学園短期大学研究助成金を受けて遂行された。